

「私が指揮者になつたのは、ウィーン・フィルのせいなのです」と笑う。

10歳の頃、合唱団としてウイーン国立歌劇場の『カルメン』の舞台に立ち、オケ・ビットから沸き上がつてくる音色の素晴らしさに歌うのも忘れて立ち尽くしていたという。そんな彼が、ここ7年ほどウイーン歌劇場に客演を重ね、信頼関係を築き上げ、来日公演に同行する。

「《ロベルト・デヴリュー》はドニゼッティのオペラの中で最も興味深いものです。人間が精神的極限まで達した時、別の人格になるという究極の劇性が表現されている作品だからです。エリザベッタ個人の愛だけでなく、イギリス女王としての任務、そして愛人の名前を知りたいがためになされる取引などを表現するために、さまざまな色が要求されます。

私がこのオペラを初めて振つたのは、現在音楽監督を務めるオヴィエード・フィルとの演奏会形式でした。それから15年以上の間に60回弱にもなりますが、毎回飽きることなく、燃え上がるのを感じます。

このオペラは音楽的頂点が何度も重なつていて、最後のシーンにたどり着きます。そこでドニゼッティは、頭がドンドンドンと叩かれるような音を書いています。そしてロベルトの死刑が執行された

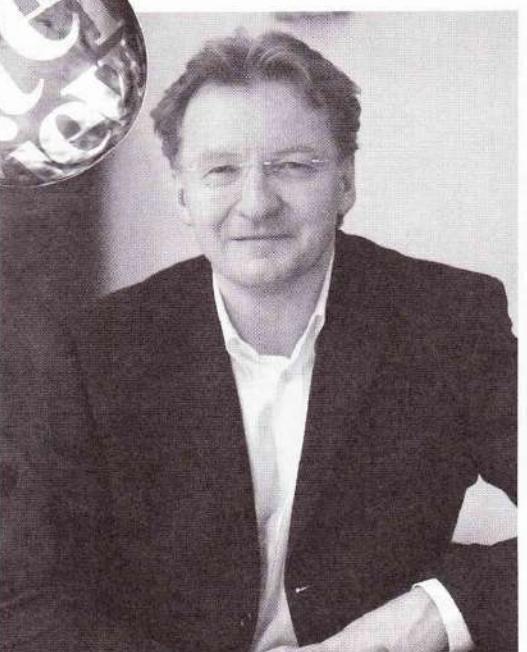
瞬間、エリザベッタの頭の中は、人間の想像を越える死というものに支配され、正気を失つていくのです。

他のベルカントオペラと同様に、どんな小さなミスでも聞き逃してもらえない透明性が、オケの難しさです。この時代の作曲家たちは管弦楽的手法が上手ではないので、後の時代に出て来るようなシンボリックな色がオケではなく、一種の伴奏に徹しつつ、言葉を持たないオケに、状況を音楽で表現させなければならぬ。状況を音楽で表現させなければならぬ。

フリードリヒ・ハイダー

トーマス・ローリング　エディター
とりわけ世界中の名歌手たちからの信頼の厚いマエストロ、
9月、ウイーン国立歌劇場日本公演では
『ロベルト・デヴリュー』を指揮

Text=Shinobu Naka



ヴァルザークの協奏曲を録音しました。Rihartesというレーベルから発売予定ですので、日本の皆さんにお会い出来る時までに発売されているといいのですが……。

柄だと私は思います。此細な部分にまで表現の可能性が無限にある役だからです。究極的心理ドラマは、音楽の中だけで表現が可能なので、演奏会形式の上演に向いています。

現在は指揮者の仕事で多忙ですが、指揮者は自分で音を出すことができないのでは、ピアニストに戻ると、ピアノという媒体を通して音楽が伝えられることが嬉しいです。グルベローヴァとは長い間共演してきましたので、プライベートでは終わってしまった関係も、音楽世界の中では普遍です。初めて会って、その2日後にはもう本番ということも珍しくない現代にあって、彼女のよくな藝術上のパートナーは貴重です。彼女の他にも、カサロヴァやスカンディウツィとの共演が気に入っています。最近では、ティボー・コヴィツ、フランツ・バルトロメイと組んだトリオで、ラームスやド

